「後半はいよいよ滑稽俳句　こんなのが好き」

藤森荘吉

（続）言葉遊び―《転換ミス》「貝が胃に居ました→海外に居ました」「謝りを尚しなさい→誤りを直しなさい」「企画長サブ→企画調査部」「滑稽は行く協会→滑稽俳句協会」

ギャグ―すし屋のカウンター「旦那穴子ですか」「俺は人間だぁ」、老舗の鰻屋「鰻も昔のようなのは手に入り難くて」「昔恋しや銀座の鰻」、「君ラッキーだね」「うん（運）」、「ではどうぞ一句」「四句八句です」

俳句は言葉を拾う作業であり、相性の良い言葉を結びつける作業である。洒落を考えたり、同音異義語を幾つも思い浮かべたり、言葉で遊ぶのは、ユーモアの感覚を養い、様々な言葉の綾を手繰り出す脳内の所作である。即ちこれらは、五音七音五音の語彙を抽出し俳句に転換する作業のウォーミングアップだ。よく売れそうな本のタイトルを考えてみるとか、回文とかもトレーニングになるだろう。しかし、ちょっと脱線しすぎたかしら…。

こんな俳句が好き―全くの個人的好みをご披露しよう。

漱石の猫の死を伝える松根東洋城の電文「センセイノネコガシニタルサムサカナ」、対する高濱虚子の返電「ワガハイノカイミヨウモナキススキカナ」。控え目な俳味、滑稽が自己目的化していない。

そして正岡子規の句も。「初日さす硯の海に波もなし」。滑稽というより見立てのスケールが巨大すぎてナンセンスっぽい。「今年はと思ふことなきにしもあらず」。三十にして立つという而立の歳を迎えながらも、意を致したようなそうでないような曖昧の妙味。「大三十日愚なり元日猶愚也」。滑稽よりも自己を飄逸が貫いている。

私が初めて師に添削を仰いだ句「春埃（ほこり）掃除が趣味といふ男」。師は赤鉛筆で「面白い」と書き添えて返してくれた。きっと面白い句なのだ。

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

文人や落語家・芸人の作に粋で面白い俳句が多い。内田百閒（薫風や本を売りたる銭のかさ）、岡本文弥（白梅やわれをも含め人が邪魔）、戸板康二（春昼や狂はぬ猫の腹時計）、小沢昭一（声かけて昼寝の足の返事かな）の句のファンである。

そして、久保田万太郎が安藤鶴夫「落語観賞」（昭和二〇年代刊）の序文に贈った俳句、コレは必見。落語ひとつひとつに句をつけて贈っているもので、平成二十一年「わが落語鑑賞」（河出文庫版）のあとがきに再録されている。

「酢豆腐」―たゝむかとおもへばひらく扇かな

「素人鰻」―夏の夜の酒にのまるゝ性根かな

「厨火事」―短日の夫婦のでるのひくのかな

「干物箱」―猫の恋猫の口真似したりけり

さあこれにて、連載もこの年もおしまい。終わりよければ…。「年忘れ自分よければすべてよし」。

［完］

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。